

メキシコの金利引き下げについて

2014年6月9日

メキシコ中央銀行は6月6日（現地時間）、0.50%の政策金利の引き下げを決めました。これで同国の政策金利は3.00%と過去最低となりました。

なお、今回の引き下げは2013年10月以来であり、多くの市場関係者の予想外の決定でした。このため金利が急低下し、メキシコ・ペソは一時的に下落しましたが、その後は落ち着きを取り戻しています。

《利下げの背景》

メキシコ中央銀行は声明で経済が低迷しており、金利を引き下げてもインフレ率が3%に向け収束していくことが見込まれるとしています。

今回の決定の背景には①景気下支え、②予想インフレ率の落ち着き、③地政学リスクの小康状態や米国量的緩和縮小開始の影響一巡、などが考えられます。

①メキシコ経済は2014年1～3月期の実質GDP成長率は前年比で+1.8%（前期は+0.7%）だったものの、前期比では+0.28%と低迷しています。また同財務公債省は2014年成長率見通しを+3.9%から+2.7%へ引き下げています。足元でも消費者信頼感指数、個人消費支出など個人消費関連の指標や鉱工業生産の改善も遅れています。

②メキシコではインフレターゲット（3.0%±1%）が導入されています。4月のCPI（消費者物価指数）は前年比で+3.50%と同ターゲット内にあります。一時、懸念されていたインフレ率も落ち着いており、中銀声明と整合的といえます。

③米国QE3（量的緩和第3段階）縮小開始時には資本流出が不安視されましたが、その後も直接投資の流入が続いているとみられることや中東・ウクライナの混乱による地政学リスクの影響も小康状態となっていることがあります。

《今後の景気、為替について》

メキシコ経済は①輸出先である米国経済（2012年輸出金額構成比：78% JETRO HPより）、②海外就業者（移民、出稼ぎ労働者等）からの送金、③原油価格の動向、これらの影響を受けています。

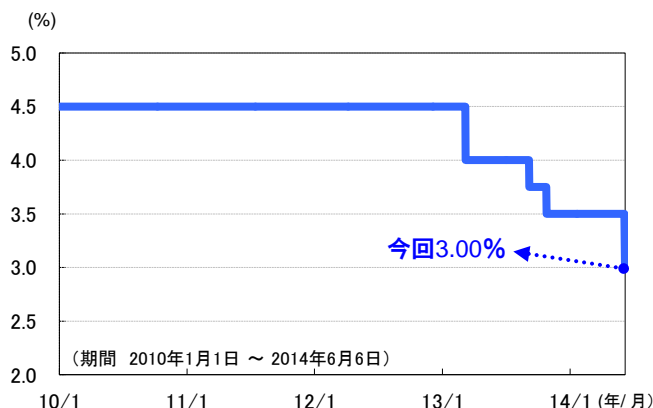
①米国では異常気象の影響もあって2014年1～3月期の成長率がマイナスとなり失速が懸念されていましたが、足元の経済指標は好転しています。先日の地区連銀経済報告でも全米各地域で景気拡大が報告されています。

②米国雇用情勢の回復によりタイムラグを伴い海外就業者の送金額が増加基調になるとみられます。

③原油価格、WTI先物価格がウクライナ、中東情勢の混乱など地政学リスクの高まりから、1バレル＝100ドル台で推移しています。輸出に占める原油のウェイトが高いため輸出増も期待されます。また昨年の海外からの直接投資額も2008年の金融危機前の水準を超えており、今後もエネルギー改革法案（石油・ガス産業の民間開放）の成立に伴う外国資本の流入期待が高まっています。

為替レートについては主要通貨に対して底堅い動きが続くとみています。中央銀行が利下げを一回限りとし唆していることもあり下値は限定的と考えています。

《メキシコの政策金利》



出所：Bloombergより明治安田アセットマネジメント作成

《メキシコ・ペソの対円推移》



出所：Bloombergより明治安田アセットマネジメント作成

- 当資料は、明治安田アセットマネジメント株式会社がお客さまの投資判断の参考となる情報提供を目的として作成したものであり、投資勧誘を目的とするものではありません。また、法令にもとづく開示書類（目論見書等）ではありません。当資料は当社の個々のファンドの運用に影響を与えるものではありません。
- 当資料は、信頼できると判断した情報等にもとづき作成していますが、内容の正確性、完全性を保証するものではありません。
- 当資料の内容は作成日における当社の判断であり、将来の運用成果を示唆あるいは保証するものではありません。また予告なしに変更することもあります。
- 投資に関する最終的な決定は、お客さま自身の判断でなさるようお願いいたします。